

「やっぱり、あの地下室か？ 床が傷んで抜けそうだったから、オレ、すごく用心してたんだけど」

座れと、保安官は空いた椅子を手で示した。昨日、チコが任命書に署名したときの椅子だ。チコはよろめき、椅子の脚に足をぶつけて大きな音をたてると、その音に自分でびっくりした。額から汗が滴したる。

「おっつけ本部センターの連中が来たら、おまえさん、すぐ拘束される。せめて武装していない方がいいと思わんか」

チコは、手のなかの拳銃を、自分がこんなものを持っていることに今初めて気づいたというように見下ろした。そしてそれを保安官の机の上に置くと、掌てのひらをズボンの腿にこすりつけた。

「攪乱装置は出せないんだ」

保安官は片眉を吊り上げた。

「通信機と一緒に、内耳に埋め込まれてるから」

「へえ、進歩したもんだ」

保安官は机に腕を載せ、身を乗り出した。

「チコ、本当はいくつだ？」

「——十九歳」

まさに子供だ。